

立川武蔵 著

「西蔵佛教宗義研究 第一卷」

——トウカン『一切宗義』サキヤ派の章——

小川 一 乘

インドからチベットに佛教が本格的に伝来された八世紀中期以後、チベット佛教は、シャーンタラクシタ (Santarakṣita, 725~788頃)とカマラシーラ (Kamalaśīla, 740~795頃)の師弟をはじめとし、アティーンシャ (Atiśa, 982~1054)にいたるインドの高僧たちを次々と招聘して、準サンスクリット語と評価されている言語を創作してインド佛教を忠実に輸入し、世界的な文化事業というべきチベット大蔵経を完成する一方、他方では、佛教がチベットに定着していく中でチベット佛教独自の展開をとげ、ニンマ派をはじめとしゲルク派にいたる数々の宗派を生み出した。

ところで、チベット佛教は、西欧人によって Lamaism (ラマ教)とも呼称されている如く、ラマ (Dharma・師)の教えを継承していく師資相承を中心としている。従って、チベットにおいては、宗派は各々独自の師資相承を有し、積尊から現在の

自分にいたるまでの克明な師資相承の系譜を記録し、その上で、自らの宗派の教義 (宗義・śūtrānta)を展開している。このことは、チベット佛教文献の中に、「伝記 (nam thar)」や「師の系譜 (bla bryud)」といった種類のものが多数見出されることから知られる。すなわち、チベット佛教における宗派は、積尊以来のインドにおける諸学派の教義を、ときには簡単に、ときには詳細に記述した上で、自らの宗派の形成 (師資相承)と宗義とを述べている。それは、あくまでも、自らの宗派が、インド佛教を前提としたものであることを表明したものであるが、このように、自らの宗派がインド佛教と一直線上にあることを意識していたチベット佛教の姿勢こそが、あのチベット大蔵経を生み出した資質であるともいえよう。同じく、インド佛教を輸入した中国の佛教受容の姿勢と比較するとき、その相異に注意されよう。

さて、本書「西蔵佛教宗義研究 第一卷」は、このようなチベット佛教を代表するすべての宗派について、その形成と宗義とを集成した「一切の宗義の起源と綱要を示す『善説水晶鏡』」(Grub mthab thams cad kyi khuis dar hdoḍ tshal ston pa legs bśad sal gyi me loṅ)の中の第五章「サキヤ派 (Sa skya pa)の章」の解説研究である。このテキストは、第二代トウカン・ロサンチューキニヤ (Thunpu bkwan Blo bzani chos kyi ni ma, 1737~1802)によって作られ、チベットの佛教および佛教史を研究しようとする者によって、トウカンのシ

ヤルキメモロン」という呼称で一定の評価を得ているものの如くである。その所以は、本書においても説明されている如くに、このテキストのような「宗義 (grub mthah)」は、「一般的には、ジャムヤンシェーパ (Hjam dbyans bshad pa, 1948～1972)」によって集大成された「大宗義 (Grub mthah, chen mo)」の内容が、前七章までにおいてインドにおける佛教以外の諸学派を扱い、第八章有部、第九章経量部、第十章唯識派、第十一章スヴァータントリカ中観派、第十二章ブラーサンギカ中観派となつてゐる如くに、「チベット人の手によるインド哲学思想理解の集大成」といった内容で、「主として、インド思想、特に佛教を取り扱い、チベットにおける諸学派はほとんど取りあげられていない」のであるが、このような「宗義」の一般的傾向に対して、このテキスト「一切宗義シャルキメモロン」は、「インド佛教にはわずか一章のみをあて、チベット佛教諸学派にそのほとんどの頁数をさいている」という特色ある内容となつてゐるからである。しかも、「チベット佛教を主としてとりあげる大部な『宗義』はこの『一切宗義』以外には見あたらない」ということであり、このテキストは多くの研究者によって注目されてきている。すでに、Sarat Chandra Das, Helmut Hoffmann, Aloka Chattopadhyaya, D. S. Ruegg 等によつて研究され、章によってはその章の全訳が試みられている。本書は、これらの研究者の成果の中に含まれていない「サキヤ派の章」に対する学界最初の学問的研究成果である。

本書は、第一部「序論」と、第二部「『一切宗義』サキヤ派の章訳註」と、それに第三部「テキスト、系図、その他」との三部から成つてゐる。

第一部「序論」(一～五四頁)は、インド→チベットに関する佛教概論ともいふべき内容のものである。

Ⅰ「宗教における二つの極」では、俗と聖、迷いと悟り、人と佛、という宗教問題の基本がまず述べられている。

Ⅱ「宗教の歴史的背景」では、(1)チベットに佛教が伝来された歴史的背景としてのインドの佛教史と、(2)チベットの佛教受容の歴史経過とそこに成立した各宗派の形成とが、きわめて簡明に説明されている。

Ⅲ「トゥカン『一切宗義』では、1「テキストと著者」として、テキストの構成内容と著者トゥカンの略歴が紹介されているが、加えて、このテキストに対する現今までの研究事情も簡単ながら紹介されている。まず、テキストの構成内容が示されているが、次の如くである。(一)内は、本書の底本であるゴンルン(Dgon lun・佑寧)版の枚数であり、全体で三〇六枚である。

目録(二枚)

総論及びインド佛教(二九枚)

インド以外の地における佛教と他の思想

(1) ニンマ Rin ma 派(二一枚)

(2) カダム Bkah gdams 派(一七枚)

(3) カギヤ Bkah bgyud 派(三四枚)

(4) シンチェ Shi byed 派 (一一枚)

(5) サキヤ Sa skya 派 (二四枚)

(6) チョナン Jo nan 派 (二五枚)

(7) ゲルク Dge lugs 派 (八七枚)

(8) ボン Bon 教 (八枚)

(9) 中国儒教及び道教 (一一五枚)

(10) 中国佛教 (一六枚)

(11) モンゴル及びジャンバラ Sambhala (一九枚)

次に、テキストの著者トゥカンの略歴について述べられているが、いまそれを紹介することを省略する。ただ、このテキストの内容からして、トゥカンが生きた一八世紀という時代は、チベットの学僧たちが中国や蒙古という地をも含めた広い世界に活躍できた時代であったようにうかがえる。

2 『宗義』というジャンル」では、「チベットにおいては著作に関するいくつかのジャンルが決っており、作者達は自分の著作がどのジャンルに属するかを意識し、その題名の中にジャンル名を含ませるのが普通である」と述べ、それらのジャンルとは、(1) 弟子が師の伝記をまとめる場合のように、一人の僧侶の生涯を年代順に追ってゆく「伝記 (man thar)」(2) ターラナータやプトンの佛教史のように、一般に学派ごとに現われた僧侶達の簡単な「伝記」の連続体である「佛教史 (chos bgyun)」(3) 師と弟子との関係に力点を置いて学派の人脈などが描かれている「師の系譜 (bla bgyun)」(4) インデやチベットなどの各学派において確立され体系化されている教義を述べる「宗義

(grub mthar)」等である。このテキストが、その書題からして(4)「宗義」のジャンルに含まれるものであることは明らかであるが、実際の内容からすれば、このテキストの各章の前半には、(2)「佛教史」も含まれている。

3 『一切宗義』サキヤ派の章の構成」では、まさしく本書で解説研究されている「サキヤ派の章」の構成内容についての略説である。すなわち、

(1) 総じてサキヤ派の宗義の形成過程

(2) 特にサキヤ派の主要な法である道果説等の形成過程

(3) サキヤ派の見解の解説

という構成であるが、(1)はいわゆるサキヤ派の「佛教史」であり、(2)と(3)とにこのテキスト「宗義」の独自の価値のあることが注意されている。

IV 「基本概念」では、佛教々理における重要な術語、*darśana* (lta ba・見)・*vikalpa* (nman rtog・分別)・*prapañca* (spros pa・戲論)・*grāhya-grāhaka* (gzun ba-hzin pa・所取能取)・*ābhāsa*, *pratibhāsa* (snan ba・顯現)・*bhānti* (ñkhrul・迷乱)・*prayogakrama* (sbyor bahi lam・加行位)・*maṅḍala* (dkyil ñkhor・マンドラ)・*utpattikrama* (tskyed rim・生起次第)・*nūpannakrama* (rdzogs rim・究竟次第)等の概念規定が行なわれている。著者は、ここに示した術語のみを取りあげているが、他にも難解な佛教用語のあることはいうまでもない。いまは、著者が本書において解説を行なったについて、最低限度これだけの術語の概念が明確にされなければ解説が困難

であろうという著者自身の解説にあたっての配慮から、これらの術語に対する説明がなされたものと推察される。

V 「道果説」は、本書において解説研究された「サキャ派の章」における代表的なキサヤ派の教義であり、密教々説である「道果説」に関する解説である。道果説とは、きわめて簡単に著者の言葉で紹介すると、次の如くである。

「迷いという悟りの『因』から修行という『道』を経て悟り即ち『果』に至るとというのが佛教における修道論の一般的理解である。この場合、『道』とは『俗』の極である『因』と、『聖』の極である『果』との仲介者と考えられる。……『道』によって『俗』と『聖』との二極は結びつけられるのであるが、その結びつきをさらに直接的にしようとする大乘佛教徒、特に佛教タントリストは『果』を動的なものとして把握し、『道』に已に『果』が含まれている、と考えた。……このように元来仲介者である『道』に目的である『果』をひきこむ方法は、『道果』(Tam bras)と呼ばれている思想に特に顕著である。『道果』とは『果を有している道』(Tam bras bu dai dan pa)の略称である。」

と。この道果説に関して、第一に「道果説の歴史的背景」をまず略説し、続いて、第二に「金剛句偈」に叙述されている道果説」として、サキャ派の道果説が展開される基本ともなった金剛句偈(Rdo rje tshig rkan)を取りあげ、このテキストとの関連の上で、その最も重要な部分の和訳と解説とを行なっている。最後に、第三には「チベットルゴンポ」が伝える道果説」

として、サキャ派の本家に伝わった道果説の伝統の他にも幾つかの道果説の伝統があったその中の一つを代表に取りあげ、その特徴を紹介している。

VI 「輪廻涅槃無差別の思想」では、道果説が「照空無取(gsal ston bdzin med)」と表現される輪廻と涅槃との無差別を説く思想であることの説明をしている。この「照空無取」とは、

- (1) 心は照(認識の対象として顕われたもの)である。
- (2) 心は空(幻)である。
- (3) 心は照でもあり空でもあり、照と空との融合したものであり、照とも空とも把握できない無取である。

ということであり、照↓空↓無取という三段階として佛道修行がより高次なものとなっていくことを示した句である。これが道果説の見解であり、第三の段階こそがその最終目的であることはいままでもない。そして、この三段階は、八世紀のインド学僧シャーンタラクタによって確立された「大乘佛教は唯識派と中観派に分れる。唯識派はまた有相唯識派と無相唯識派とに二分されるが、後者は前者よりも高い位にある。中観派は最高位に位置する」という教判を継承したものとされ、第一段階は有相唯識派に、第二段階は無相唯識派に配当され、第三段階こそ「中観派の哲学をその理論的基礎としている」と説明されている。

Ⅷ 「結び」では、チベット佛教に共通な態度としての顕教から密教へという展開がサキャ派の見解の上にも、もとより顕著であることを述べ、顕教にあつては、真実は主客に対する不断

の否定の彼方にあるものであり、その否定の彼方にある真実を、逆説的に主客の融合(俗の肯定)の中に証悟するところに密教の面目のあることを論じている。著者は、「序論」を終えるにあたって、最後に「トゥカン『一切宗義』(サキヤ派の章)が最後に達したもので、それは逆説であった」との言葉をもって結んでいる。

第一部「序論」が終り、三九〇―五四頁に「序論註」があるが、その内容はきわめて詳細であり、本文と同様に重要な教示を与えてくれる。

第二部「『一切宗義』サキヤ派の章訳註」(五五〇―一〇六頁)は、まさしく本書の課題であるテキストの解説研究であり、訳(五五〇―八九頁)と註(九〇―一〇六頁)とより成っている。訳出は、底本の頁(葉)数と行数とを逐一示しながらすすめられている。ところで、「サキヤ派の章」が大きく三章に分けられていることはすでに紹介したが、その中、その章名によって明示されている如く、第一章はサキヤ派の佛教史であり、第二章はサキヤ派の中心教義である道果説の形成史であるのに対して、第三章の「サキヤ派の見解の解脱」は、まさしくサキヤ派の宗義が解説されている哲学的内容のものである。特にこの第三章に少しく興味が引かれるのは、その内容がインド佛教文献とどの程度に関係しているかという点である。その点に注意すると、この章の前半の「頭教の見解」の中には、聖提婆の四百論第八章の第一五偈が引かれ、先に紹介した道果説の三段階

を解説するための典拠とされ、また後半の「密教の見解」の中には、道果説の第三段階を解説する中に、竜樹の中論第七章の第三三偈 *caḍḍa* が引かれ、一切が縁起の故に無自性であることを確立する典拠とされている。インド佛教との直接的な関係としては、この二典拠が用いられているのみであるが、もとより、その解説文の中には中論を背景とした空思想の展開が多く看取される。

次に、訳出に関する問題点については、本来ならば、訳文の全てにわたって逐一検討すべきであるが、いまは訳文を通読して思いついた点を一つ指摘して私見を述べるにとどめたい。それは、チベットにおける中観説解説の一つのパターンとして、一切法は *bden grub* (真実なるものとして成立する・諦成)、もしくは *bden yod* (真実なるものとして有である・諦有)と見るところに *bden 'dzin* (真実なるものと執著する・諦執) が共生するのであり、その否定として *bden med* (真実なるものとして無である・諦無≡勝義無)があり、それが *bden ston* (真実なるものとして空である・諦空) ということでもあるというのが、*bden* という語を中心とした術語の関係であると、ツォンカバ (*Tson kha pa*・宗喀巴) などのチベット文献の上で理解されることである。いまもこれらの術語が、やはり重要な役割をはたしているように見られる。この術語に関連して、解説文の中に「すべてのものはハリと無なるものとなり (*chos thams cad bden med du khral gyis 'ngro*)」とある一文などはどのように理解してよいのか。その意味は「すべての

ものは真実なるものとして存在しない（諦無≡諦空）と「了解され、すべてのものは真実なるものとして存在するという執着（諦執）が脆く崩れさるのである」ということであろうか。

第三部「テキスト、系図、その他」（一〇七—一六六頁）は、次のような内容から成っている。

I 「『一切宗義』サキャ派の章テキストでは、本章のテキストの底本となった東京大学蔵ゴンルン寺版のリプリントが揭示され、特に異版シヨル ShoI 版との対校がなされている。

II 「『一切宗義』サキャ派の章系図」では、テキストの中に述べられている「『一切宗義』におけるゴン Hkhon 氏」「頭教の教説の伝承」「ゴン Not 派」「ゴン Bdzoi 派」「ツアル Tshar 派」「道果説の系統」等が系図で示されている。

III 「『金剛句偈』目次」では、道果説の基本となっている金剛句偈の科文がチベット原語で示され、三異本の頁行数も示されている。

IV 「『金剛句偈』テキスト」では、金剛句偈の一本(LB, Vol. ta, Lam hbras Pad Ser, 5a~10a) のリプリントが揭示されている。

V 「『一切宗義』サキャ派の章索引」では、テキスト(サキャ派の章)の「和漢→チベット」の索引が作られている。

以上、本書の内容を概観したのであるが、きわめて困難な解説研究を遂行された著者の努力のほどが窺われる。本書は、著者の「まえがき」に記されている如く、「チベット人との協同によるチベットの言語・歴史・宗教・社会の総合的研究」の成果の一部であり、日本に招来したチベット人学僧と日本の研究者との協同による研究ということが一九六一年以来行なわれてきたその最初の成果である。実は、筆者も、この「総合的研究」の末席を汚しているのであるが、筆者一人の学力ではその責任を完遂できるものでなく、著者ですらチベット人学僧からの多大な教示を得たことを記している如く、チベット人学僧の協力なくしては遂行しえない研究であることを痛感している。

思うに、チベット佛教学、特にこの「一切宗義」のようなテキストを研究対象とする場合、チベットの歴史と佛教学(哲学)とが不分離に密着して関係しあっているものであり、チベットの歴史に対する知識と佛教学理に対する知識とを合わせ持たなければ、その研究は完全なものとならない。従って、近代の哲学(佛教学)と歴史とが分離された学問では間にあわないというべきであろうか。ここに、本書の成果がどのような意味を有するものであるかは自明であろう。ともあれ、本書のような成果が日本の研究者によっても公刊されえたことの意義を思い、著者の努力に敬意を表する次第である。

(B5 版横組、一六六頁、一九七四年、東洋文庫、非売品)